

自己欺瞞とフォーク・サイコロジー

塩野直之 (Naoyuki SHIONO)

東邦大学

この発表で私が出発点とするのは、自己欺瞞の問題は、人の行動や思考に関するフォーク・サイコロジカルなモデルにその基盤を持つという点である。すなわち自己欺瞞は、人の持つ命題態度に矛盾やそれに類するものが見られるという点がパラドクシカルなのであるから、フォーク・サイコロジーを前提して初めて成り立つ問題である。そしてこれに対する解決も、そのようなモデルの内部で、パラドクスを解消ないし軽減する道を探るというかたちで探求されてきたのであった。

それゆえここではまず、フォーク・サイコロジーとはそもそもいかなるものかをふり返ることが重要である。フォーク・サイコロジーとは、人の行動や思考を説明し、理解可能なものとするためのモデルである。ところで、これに関して非常に重要でありながら、しばしば十分な注意を払われないのが、規範理論と記述理論の区別である。規範理論とは、人がどのように行動し思考すべきかを規定する理論である。つまり、それは理想的に合理的な主体を描く理論である。他方、記述理論とは、人が現実に示す行動や思考を描く理論である。これら両者は、あまりに大きく乖離することは許されないにしても、はっきりと区別されるべきである。

フォーク・サイコロジーによる行動や思考の説明や理解は、当の人が合理的であることを前提とするとよく言われる。だがこのような言い方はしばしば、上の規範理論と記述理論の区別の軽視の上に成り立っている。たしかに、人の行動や思考が合理性を一切欠いたものであったなら、それらは理解可能なものとならない。だが、それらが完璧に合理的なものであることは、理解可能性にとって必要ではない。理解可能性は、人が規範理論としてのフォーク・サイコロジーに完全に従うのではなく、記述理論によって描きうることだけを必要とするのである。

記述理論としてのフォーク・サイコロジーは、人の行動や思考のあるものが合理的であり、他のものが合理的でない場合に、その両者を理解可能なものとするための道具立てを含んでいる。つまり、合理的でないものについては、「愚かである」「軽率である」「ちょっと頭が混乱している」「感情に流されている」「目先のことしか考えていない」などといった概念が、その人がなぜそのように行動したり思考したりしたのかを理解するための説明において役に立つ。それらの概念は、たしかに当の人を合理性の観点から非難する含みを持ち、その行動や思考を改めることを迫るものではあるが、その人を理解することにはむしろ寄与するのである。

このように、「合理性の破綻」は、人の行動や思考の説明や理解という記述的な営みにおいて、必ずしも格別に問題視すべき事柄ではない。すると、自己欺瞞の問題を考えるに際しても、そのどこが問題なのか、再考する必要があるだろう。というのも、

自己欺瞞をはじめとする不合理性の諸形態が、近年の哲学の中でさかんに論じられてきたのは、それらにおける合理性の破綻がただちに何らかのパラドクスを招くという懸念が背景にあるからである。そしてその再考に基づいて、この問題の解消のためにしばしば提案されてきた、「心の分割」といった論点の妥当性も再評価すべきだろう。

自己欺瞞のパラドクスには、静的パラドクスと動的パラドクスの二種があると言われる。「静的パラドクス」は、主体が p と $\sim p$ という信念を同時に持つことから生じる問題である。私の考えでは、矛盾する信念の同時所有という状態自体は、それほど深刻な問題ではない。もちろん、理想的に合理的な主体は、そのような状態に陥ることにはないであろう。だがそれは、現実の人にはよくあることである。そして記述理論としてのフォーク・サイコロジーは、その人はたぶん感情に流されてちょっと頭が混乱しているのだ、といった言い方でその事態を理解可能なものとしてくれるであろう。

尤もここには、記述理論としてのフォーク・サイコロジーはあくまでも「フォーク」なものであり、それほど緻密なものではないということが絡んでいる。すなわち、そのような人は、実は p と $\sim p$ のいずれかあるいは両方を真正の信念として保持するに至っていないのであり、したがってその人を矛盾する信念を同時に所有しているものとして記述するのは適切でない、と論じることは可能である。そしてそのように論じる者と、当の人にあくまでも矛盾する二つの信念を同時に帰属させる者とのあいだの論争は、決着のつかないものとなるだろう。

だが私の見るところ、記述理論としてのフォーク・サイコロジーにとって、矛盾する信念の同時所有という状態を回避しなければならない格別な理由はない。このことが招く困難があるとすれば、せいぜい、「 A は $\sim p$ と信じている」から「 A は p と信じていない」を導出することは必ずしもできないという程度である。だがそのような導出は、そもそも規範理論に属するものであって記述理論では無条件に認められるべきものではない。したがって、このような人の心の状態を記述するために、矛盾する信念の同時所有を回避した心のモデルを構築する必要はなさそうである。

自己欺瞞に困難があるとすれば、それは、 p という信念と $\sim p$ という信念との間に成り立つ独特の因果的プロセスにある。そしてこれは、自己欺瞞の「動的パラドクス」に関わる。すなわち、 p という信念があるからこそ、その人は自らを欺いて $\sim p$ と信じさせようとするのだとすると、それは決して容易なことではない。というのも、人を欺くという意図は、それが欺かれる当人に気づかれてしまうと、成功することはないだろうからである。

私はこの動的パラドクスに対する解決をまだ手にしていないが、どちらかというところ、メレと同じく、自己欺瞞から「意図性」を剥奪する方向が最も有望だという考えに傾いている。このことが意味するのは、自己欺瞞の事例と他者を欺く事例とのあいだには、完璧な類比は成り立たないということである。だが、これはむしろ当然とすべきであろう。他者を欺くことは、完全に合理的な主体どうしても可能なことである。自己欺瞞においてわれわれが目指しているのは、不合理な主体を理解可能なものとして記述することである。両者の類比を完璧に成り立たせることを追及して、心の分割といったモデルを提示することは、またしても、規範理論と記述理論との相違を軽視し、規範理論をそのまま現実の人にあてはめようとする誤りである。